
造花の花束

椎名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

造花の花束

【Nコード】

N3568BA

【作者名】

椎名

【あらすじ】

過去の私を束ねて、今の私がいるから

（前書き）

ご閲覧頂き誠にありがとうございます。

本作品は執筆予定小説の登場人物のサブストーリーとなっております。

明けない夜、消えない命、枯れない花。そのどれもが矛盾した存在だ。望まずとも日は昇るし、どんなに死にたくてもそう簡単には死ねない。だからこそ、私に対する造花という比喻表現は実に適確で、心地よかった。

その存在そのものが矛盾していて、作り物の私。表象に現れる私とは、周りが作ったイメージの私でしかない。そのどこにも私はいないし、その余地はもとからなかった。

そう。これは全て他人の話。

「どうしようもないわ」

「どうにかしようとしてないくせに」

私は鏡に話しかけた。鏡に映った彼女は、私の動きに合わせて口を動かす。しかし声は遅れてやって来た。

「言ってくれるじゃない」

「言うまでもないわ」

私は鏡に手を伸ばし、指先を伝わせた。鏡の上で紅色の液体が跳ねる。私はそれがなんなのか知っていた。

「呆れてものも言えないわ」

「やけに余裕じゃない」

それは、これまで彼女が流してきた鈍色の血だ。これだけ大量に出血しても、彼女は笑っている。私はそれが理解できることが嫌だった。

「それは、貴方だってそうじゃない？」

「愚問だわ」

彼女は即答すると、鏡から左手を出した。鏡を伝うそれに塗れ、朱に染まっていく。しかし彼女はそれを気にする素振りもなく左手を私の右頬に当てた。生暖かい液体が頬を伝う。

「貴方は私、私は貴方でしょう？ 本来一つであるべきなのよ。な

のにこんなになつて……ねえ、まだ拒むの？」

私の血が彼女の腕を伝つて滴り落ちる。どうやら彼女の爪が食い込んだようだ。彼女は泣きそうな顔で私を見ている。

「何か、勘違いをしているわね。私、拒んでなんかいないわ。それでも一つになれないのは、きつと、貴方と私が不一致だから」

「他人だつて言うの？」

私が冷静に答えると、彼女は涙をこぼして言った。自分の泣き顔を見るといふのはなかなか複雑な気分だ。

「いえ、貴方はどうしようもないくらいに私よ。けれど、貴方は枯れないでしょう？　これだけの傷を負つても、貴方が枯れることは決してない。それに比べて私は、いつか枯れるわ。死ぬのよ。？？分かつたかしら？」

私が静かに告げると、彼女は目を見開いて唇を噛み締めた。ゆっくりと手を引き、だらんと下げる。

「？？つまり、私は、貴方が死んだら取り残されるのね。誰でもない私だけ、置いていかれるのね」

「そういうことになるわね」

私の即答に、彼女は絶句した。もう口の動きも合っていない。表情さえも継ぎ接ぎだ。そんな気まずい沈黙の中、先に口を開いたのは彼女だった。

「……いい？　私はこれからも何度も何度も傷ついて、やがてそれを受け入れるでしょう。けれど、貴方は？？貴方だけは、受け入れないことよ。たくさんの私を束ねて、貴方ができたんだから」

「当たり前のことを言わないでちょうだい。貴方に言われるまでもないわ」

私が答えると、彼女は小さく微笑んで、鏡の奥へと消えていった。「何よ、やけに余裕ね」

私にも、いつか鏡を割る日が来るだろう。そう遠くない未来、自らの手で終わらせなければいけないに違いない。

「どうにかしないとね」

まずは行動しよう。私はそう思い、再び鏡に触れた。指先から波紋が広がり、やがて紅い泉は透明な色へと変わっていく。私はまた、その鏡にふっと微笑んだ。

割らなくて済むかも知れない。そう思わせてくれたのは、今はまだ未熟な造花の花束だった。

（後書き）

お読み頂き誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3568ba/>

造花の花束

2012年1月10日05時45分発行